

教育は国の柱。

日テレ『行列のできる法律相談所』の国際弁護士、24時間チャリティの100キロ走破、かと思えば寒中水泳までこなす。6年前に参議院議員になり、現在文教科学委員会委員長の丸山和也氏に「教育」を聞いた。

聞き手：鈴木英雄 写真：善本喜一郎



国際弁護士・参議院議員 丸山和也

教育の環境整備は 政治の大事な仕事

鈴木 国会の決算委員会で「大臣の中では文部科学大臣が一番偉い」と発言。国会の中に「人を育てる場」を提案、丸山哲学の神髄は「教育が国を造る」、このように受け止めてよろしいですか？ 今日はその辺のことをお聞かせ頂ければと考えています。

丸山 経営資源や事業の三要素として「ヒト・モノ・カネ」が世の中の摂理みたいと言われているけど、社会を動かしているのは全て人だからね。政治では「教育・ヒト・モノ・カネ」をいれた四要素だね。

鈴木 司法と立法にかかわってれば「法務大臣が一番偉い」と発言しそうですが。

丸山 法律を造るのも執行するのも結局は人で決まる。今の学校や社会は入試や資格の勉強は教えても「正しく生きる」心を教えていない。考えない人があまりにも多過ぎます。子どもの頃から心を豊かに正しく育てないと国は発展しない。教育が大事だから文部科学大臣は偉くなければいけないんです。
鈴木 丸山さんの基本的思想の根幹には「人間主義」があり、人を中心に全てを考えられている。以前は法律の専門家として国会では法務委員会で活躍していました。文教科学委員会の委員長を引き受けたのは、その辺のお考

えもあるのですか？

丸山 教育は国の柱です。それにかかわる法律は国家の運命を左右すると思うか、国家の在り方を示す、また人間の在り方を示す指針ともなるべき非常に大事なものです。人間を造る教育の環境整備は政治の大事な仕事だと考えています。

鈴木 美術教育は答えの無い「心の教育」として捉えています。受験社会の日本では芸術授業は大切にされていないのが実情です。

丸山 芸術やその国の文化を大切にしない国は、人も大切に出来ません。ヨーロッパでは新築のビルには総工費の何%かは芸術品を展示又は設置が義務になっていて、アーティストを守り育てる文化があります。

鈴木 芸術を保護する事は、その国に既存するプライドなのでしょうか。

丸山 芸術も含め、何の為に生きているのか、何が大切か、国も教育者も共に考え「人を敬う心」を子どもの頃から涵養して行かなければなりません。

鈴木 『美術授業にカメラ』の活動に興味があるとお聞きして大変嬉しく思っています。

丸山 第四回『全国学校図工・美術写真公募展』の図録を拝見し、これは凄いいことをしていると感心しました。

鈴木 美術授業で制作した作品（被写体）を写真に撮る。作品の意図や撮影時に感じた事、作品を改ためて見つめ

人間を造る教育の環境整備は
政治の大事な仕事だと考えている。

芸術やその国の文化を大切にしない国は、人も大切に出来ない。



◎まるやまかずや
国際弁護士・参議院議員 1946年兵庫県生まれ。早稲田大学法学部卒業後、上級職試験合格。法務省を経て1970年、司法試験に合格。『行列のできる法律相談所』日本テレビ 丸山国際法律事務所代表、2007年参議院選挙当選。

◎すずきひろお
写真家 1952年東京生まれ 東京写真大学卒（現東京工芸大学）、広告代理店写真部を経て、株式会社ポインター代表 『美術授業にカメラ』推進統括 APA副会長

て発見した感動を文章に書く事で更に自分の感性を友だちに理解してもらおう。美術授業にカメラを持ち込んで先生方のお手伝いをしています。

丸山 教育の目的は社会とコミュニケーションションが出来る人材を育てる事です。正しい事を正しいと言える人間に育てないとだめだ。時には孤独無縁を覚悟で正義を貫いて欲しい、私みたいにな（笑）。

不器用でもできるリカバリー

鈴木 授業の第一段階の作品制作は手先の器用な生徒さんが高く評価されるのは当然なのですが、第二段階では不器用でも感性の豊かな生徒さんがリカバリー出来る。それが『美術授業にカメラ』なんです。

丸山 人生何度でも挑戦する気概や気迫が大事ですよ。諦めない人生。自然と応援したくなる。

鈴木 制作した作品はそれほど高く評価はできないのですが、自分で探した空間に置く事で光や影、背景の色や形で付加価値が出て別の作品のように見える事があります。これを「発見・即・表現」としてカメラに収めると、その生徒さんの感性が発見される。鑑賞の授業の時に教室がザワザワとなり、友だちの優秀な作品を誉め讃えます。これが大きな収穫です。公募展の審査で選ぶ時の基準はいかにリカバリーに出会えたか、素材を主役に出来たかを発

見する事です。

やはり心の教育

丸山 我々の生きるといふことは、全て選択の連続であり、選択は人生であり、かつ芸術である（『選択の科学』シーナ・アイエンガー著）という言葉があります。政治も裁判も常に選択をする事が仕事ですが、常に正しい判断をしなければいけない。人の人生がかかっている、どの立場の人もそれぞれ背景に哲学が存在しなくては正しい選択は来ません。

鈴木 写真は「選択の芸術」と云われています。何を撮るか選択、ロケハンで場所を選択、光と影を選択、ファインダーを覗きながら感じた心でシャッターを押す。頭の中は大忙しです。そして数十枚撮影した中から生徒自身一枚選ぶ。あれこれ悩みながら選ぶ責任を学んで欲しい。「選ぶ力」は「生きる力」に繋がる。これを認め合う事が授業のテーマになっています。

丸山 自分で選んだ責任、選ばれた責任、どこまで全う出来るかです。人の責任にしない事を学ぶ事が大切です。

鈴木 我々の活動の目標は五年後に中学校の美術教科でカメラを使用した授業が必修になることです。写真は表現のツールである事を取入れて欲しい。写真を通じてコミュニケーション能力を高めて欲しいんです。

丸山 日本のある外語大学では、入学

してから一年間は日本語でのコミュニケーションを中心に授業を行います。国際社会ではいかに自分の意見を持ち、発信する能力を高めることが大事であるかを学ぶ。英語は話せても中身が無ければ相手にされません。日本の文化文明を学んで自信を持って世界に羽ばたいて欲しい。やはり心の教育です。

鈴木 この授業を普及するには全国にある約3万校の小中学校の全てにカメラが行き渡り一人一台で授業が出来るように働きかけていきたいんです。

丸山 日本が経済大国になったのは「もの作りの国」として発展して来たからです。美術教育の力は大きい。ゆとり教育前のように美術教科を週に2コマにするのには難しいけど大事にしたい。自分たちで「生きる力」を考える授業は大切だ。

鈴木 丸山さんの著書の『蓮の花は泥沼に咲く』（新紀元社）で「法に魂」と「政治に魂」とあります。「生きる力」に繋がりますね。ブレない政治は人生の哲学にあると見ました。3月20日に発売された『終活』設計（明治書院）の中で遺影写真は事前に撮影して準備しておかないと遺族が大変だし、弔問客もボケボケの写真に驚く事がある。と書いていますが、60才過ぎたら遺影写真はプロの写真家が撮影する事を国会で決めて頂けると写真界に光明なのですが（笑）。

丸山 提案だけなら出来ますよ（笑）。